

アブド・アッラーフ・ブン・ブライダ

—— ウマイヤ朝期ホラーサーン地方の一タービュとその一族について ——

西村 淳一

はじめに

ウマイヤ朝期ホラーサーン地方の一都市メルヴ¹⁾に関しては、従来、初期イスラーム国家を研究する立場から大局的に論じられることは多いものの、そこで暮らすウラマー(‘ulamā’, 「知者・学者」を意味するアーリム ‘alim の複数形。)を主対象とする研究は軽視されてきた²⁾。この原因は主として史料上の制約にあるが、テーマ自体の扱い辛さにも一因がある。そもそも「誰をウラマーと呼ぶのか」また「いつ、どこでウラマーが生まれたのか」という根本的問題が未解決であり、「ウマイヤ朝期メルヴにおけるウラマーの存在」自体に議論の余地があろう。しかし少なくとも言えることは、後世の人名録史料において、当時そこにいた数名ないし20数名の人物がウラマーとみなされているという点である³⁾。これらの「ウラマー」を研究することは、メルヴ、ホラーサーン、ひいてはイスラーム世界全体におけるウラマー集団の成立を理解する上で不可欠な作業である。

そこで本稿では、そのような人物たちの中からアブド・アッラーフ・ブン・ブライダなる人物に焦点を当て、ウマイヤ朝期メルヴのウラマー研究を行うことにした。

Abū Sahl ‘Abd Allāh b. Burayda b. al-Ḥuṣayb al-Aslamī は、教友ブライダ (Abū ‘Abd Allāh Burayda b. al-Ḥuṣayb al-Aslamī, 60 ~ 63/ 680 ~ 683 年ごろ没。)を父に持つアラブ出自のタービュ (tābi’, 「後続する者」。教友の次世代を意味する。)である。父ブライダや双子の兄弟スライマーン (Sulaymān b. Burayda, 105/ 723-4 年没。)とともにメルヴへと移住し、115/ 733-4 年に他界したと伝えられている。同都市のカーディー (「裁判官」)としても知られ、後世の人名録ではホラーサーンにおける最初期のアーリムの一人

1) この都市の名は、アラビア語ではマルウ、ペルシア語ではマルヴとカナ転写される。しかし本稿では通例に従い、全てメルヴと表記する。なお他の固有名詞については、著名なものを除き、全て正則アラビア語での読み方に従ってカナ転写する。

2) ウマイヤ朝期からアッバース朝期にかけてのメルヴ史の概略については、さしあたって *EP*²: “MARW AL-SHĀHIDJĀN”; Herrmann 1999 を参照。邦文の研究には佐藤 1994 がある。ウラマー研究の概要については三浦 1995 を参照のこと。

3) 例えば『諸都市の著名ウラマー』と名付けられた Mashāhir を参照せよ。

に数えられている。メルヴ史においては著名な人物と言えるが、私見の限り、この人物に関する専著、専論は見当たらない⁴⁾。

本稿では、メルヴ・ウラマー研究の嚆矢とすべく、このアブド・アッラーフのライフヒストリーを再構成かつ分析する。また、彼の一族——以下では父の名をとってブライダ家と呼ぶ⁵⁾。——の活動についても触れ、その過程を通して先行研究で見落とされてきたメルヴ史の一側面をも明らかにしたいと思う。

I メルヴ移住以前のアブド・アッラーフ

始めに、メルヴ移住以前のアブド・アッラーフに関して、父ブライダの略歴とあわせて簡単に触れておこう。

ブライダは、より詳しい名を Burayda b. al-Ḥuṣayb b. 'Abd Allāh b. al-Ḥārith b. al-A'raj b. Sa'd b. Rizāḥ b. 'Adīy b. Sahm b. Māzin b. al-Ḥārith b. Salāmān b. Aslam b. Afṣā b. Ḥāritha といい [Nasab 2 : 144; Ṭa. Ku. 4 : 241, 7 : 8, 365; Ṭa. Kha. 1 : 240]⁶⁾、フザーア部族中のアスラム族の長であったとされる [Ma'arif : 300]⁷⁾。ヒジュラ以降のかなり早い時期にイスラームへと改宗し、預言者の諸征服活動に参加した。預言者の死 (11/632 年) 後、その後継者問題でムスリムの間に動揺が生じた時代を彼はどのように生き抜いたのか。史料は多くを語っていないが、ちょうどその時期にあたるカリフ、ウマル治世の3年目 (15/636-7 年) に、アブド・アッラーフとスライマーンの双子を授かった [Ṭa. Ku. 7 : 221; Thiḡāt 5 : 16-17; Mashāhīr : 202; T. Di. 27 : 127-29, 133, 139]⁸⁾。ある逸話に拠れば、彼らが生まれた時、父ブライダはウマルのそばに座していたという [Ṭa. Ku. 7 : 221; T. Di. 27 : 127; Siyar 5 : 51]。

4) 唯一 al-Ziriklī 1996 [4 : 74] があるが不十分である。

5) 史料には「ブライダ家」にあたる表現——例えば al-Buraydī や al-Ḥuṣaybī というニスバで呼ばれている点を考慮すれば [Ikmal 1 : 548; Ansāb 1 : 334, 2 : 229]、彼らを「ブライダ家」と呼ぶことは妥当である。

6) 「彼の本名はアーミル (Āmir) であり、ブライダという名はラカブ (laqab, 「尊称」) である。」という記述もある [Iṣāba 1 : 146; Tawḡīḥ 3 : 431]。

7) 以下、ブライダに関しては *EP*²: “BURAYDA” を参照。

フザーア族は出自がはっきりしないアラブ部族である。先行研究ではヤマン系と説明されることが多いが、史料によってはムダル系と記される場合もある [*EP*²: “KHUZĀ'A”]。

8) ブハーリーは、彼らがウマル治世中に生まれたことを記しているものの、誕生年までは言及していない [T. Ka. 4 : 4]。

なお彼ら兄弟の出生地は不明である。史料の多くは彼らをバスリーとみなすが、クーフィーとする記述もある [T. Di. 27 : 136; Tah. T. 5 : 158]。T. Di. [27 : 139] に引用された記述に従えば、父ブライダがメディナからバスラに移住する以前に、すでに2人は生まれていたことになる。

ウマル治世（13～23/634～644年）中、あるいはウスマーン治世（23～35/644～656年）中のある時期、ブライダはメディナからバスラへと移住した⁹⁾。バスラ在住期のアブド・アッラーフに関しては史料に情報が無い。しかしまさにこの時期、彼は後に生かされることになる諸知識を獲得したようである。この点については次章で詳しく述べる。

前述のごとく、その後ブライダ父子は、メルヴへ移住した。バラズリー（al-Balād-hurī, 279/892年没。）が著した Futūḥ には次のような一節がある [Futūḥ: 577; 花田 1998: 47 一部改]。

51/671-2年、ズィヤード・ブン・アビー・スフヤーン（Ziyād b. Abī Sufyān）はホラーサーンにラビーウ・ブン・ズィヤード・アルハーリスィー（al-Rabī' b. Ziyād al-Hārithī）を任命し、両軍営都市（クーファとバスラ）の民の約5万人をその家族とともに〔当地に〕移住させた。これらの中にブライダ・ブン・アルフサイブ・アルアスラミー・アブー・アブド・アッラーフがいた。彼はヤズィード・ブン・ムアーウィヤ（Yazīd b. Mu'āwiya）の時代にメルヴで他界した¹⁰⁾。

この記述に従えば、彼らの移住はバスラとクーファの民5万人とともに行われたことになる¹¹⁾。メルヴがアラブによって征服されたのは、31/651年のことであった。バラズリーによれば、メルヴに初めてアラブが居留したのは45/665-6年ごろのことであった

9) バスラ移住の時期については特定が困難である。Ṭa. Ku. [4: 242-43, 7: 8, 365], T. Ka. [2: 141], Jarḥ [2: 424], Mashāḥir [100], Istiy'āb [1: 185], T. Di. [27: 139], Usd [1: 203] 等を参照のこと。

10) Kāmil [3: 489] にもほぼ同様の記述がある。一方、T. Di. [27: 139] に引用された記述によれば、ブライダはまずシースターンで異教徒と戦い、その後、そこからヘラート路を経てメルヴに入ったという。他の史料 Ṭa. Ku. [4: 243], T. Ka. [2: 141], Thiḡāt [3: 29], Mashāḥir [100-101] にも彼がシースターンへ行ったことを示す記述が見うけられる。

11) アラブのメルヴ移住については TRM [II: 81, 155] にも情報があるが、ブライダの名前は現れない。

この大規模な移住は、イラク総督ズィヤードのムカーティラ統制策の一環として行われたものである。嶋田襄平の言葉に従えば、「それには辺境地帯を固めることのほか、将来イラクの社会不安の原因となる恐れのある要素を、あらかじめ除去する意図があった」[嶋田 1977: 104]。

一方史料には、ブライダ自身にもメルヴ移住への動機があったように記されている。それは預言者の以下の言葉が引き金になったとされる ['Uyūn 1: 314]。

預言者はブライダに言った。「ブライダよ。まさに私の後、諸遠征軍 (bu'ūth) が派遣されるに違いない。派遣された折には、汝はマシュリク遠征軍の人々の中にあれ。そしてホラーサーン遠征軍中に、またメルヴと言われる地の遠征軍中にあれ。汝がその地に達した時には、その町 (madīna-hā) に落ち着くべし。まさにその町をズー・アルカルナイン（アレクサンドロス大王）が建て、その中でウザイル（エズラ）が礼拝したのである。その川は豊かに流れる。その地の全ての穴 (naqb) の中には抜き身の剣持つ天使がおり、最後の審判の日までその地から悪を取り除く。」

メルヴを賛美したこのハディースは、ハディース集 [Musnad 6: 490], 地理書 [Mukhtaṣar: 316], 地方史 [T. Nī.: 68] などにも引用された。

[Futūḥ: 576; 花田 1998: 46] から、彼らの移住はかなり早い時期のものであったことがわかる。

メルヴ移住後の父ブライダについてただ1つ明らかな点は、彼がこの地でウマイヤ朝カリフ、ヤズィードの治世（60～63/680～683年）に没したということである [Ṭa. Ku. 4: 242, 7: 365; T. Kha.: 156; T. Ka. 2: 141; Ma'ārif: 300; Mashāḥir: 101; Istiy'āb 1: 185]¹²⁾。亡骸はジャッスィーンという地に埋葬された¹³⁾。父の死に際し、アブド・アッラーフは次のように語ったと言われる [T. Ka. 2: 141; Istiy'āb 1: 186; MmI 2: 384; Usd 1: 203]。

彼（ブライダ）は最後の審判の日、マシュリクの人々の長（qā'id）であり、彼らの光である。なぜなら預言者が次のように言ったからだ。「ある町（balda）で死んだ我が教友中の男は、最後の審判の日に、彼らの長であり、彼らの光である。」¹⁴⁾

II アブド・アッラーフの事績

1 ラーウィーとして

教友たちの死後、ムスリム第2世代であるタービュたちは「預言者の言行」を次世代に伝承する役割を果たした。アブド・アッラーフもそのようなタービュの一人であり、後世の多くの人名録は彼のラーウィー¹⁵⁾としての側面に注意を注いでいる¹⁶⁾。

後世の人名録で、「アブド・アッラーフにハディースを伝えた人物」および「アブド・アッラーフがハディースを伝えた人物」を最も多く列挙しているのは、ミZZィー（al-Mizzī, 742/1341年没。）の Tah. K. である [Tah. K. 14: 329–30]。この中でミZZィーは、前者26人、後者57人の名を挙げる。それらの人物をまとめたのが次頁【表1】および【表

12) 彼の没年は62/681–2年とも [T. Is. ḥ. 61–80: 76], 63/682–3年とも [Ṭa. Ku. 7: 8; Tah. T. 1: 432] と言われる。

13) ジャッスィーンについては、MmI [2: 384], Ansāb [4: 305], MB [2: 164] を参照。ちなみにブライダの墓碑は現存しており、ジャッスィーン墓地の位置も比定されている [佐藤 1994: 32, 52]。Жуковский 1894 にはその墓碑の写真も掲載されている。

14) 1999年10月8日、京都で行われた国際会議 “Beyond the Border” において、レッカー（Lecker, M.）は “On the Burial of Martyrs” と題した発表を行い、この逸話について触れた。そして「（アブド・アッラーフが終末論的内容を含む「預言者の言葉」を父ブライダのメルヴでの死に結び付けて語った）そのコンテクストはブライダが実際には殉教者（martyr）であったことを示唆する。」と述べた。この論は非常に刺激的であるが、少なくとも史料中にはブライダを殉教者（shahīd）とする記述は存在しない。

15) 本稿ではラーウィーという語を「ハディース伝承者」の意味で使用する。ラーウィーに関しては *EF*²: “RĀWĪ” を参照。

16) T. Is. [ḥ. 101–120: 393] には、註として彼に関するビブリオグラフィーが記されており、有益である。

【表1】 アブド・アッラーフにハディースを伝えた人物

(Tah. K., vo. 14, p. 329)

	名	前	備考
1	Anas b. Mālik		教友。91 ~ 93/ 709 ~ 711 年頃没。
2	Burayda b. al-Ḥuṣayb		教友。本人の父。60 ~ 63/ 680 ~ 683 年頃没。
3	Bushayr b. Ka'b al-'Adawī		教友。タービュとみなされることもある。
4	Ḥumayd b. 'Abd al-Raḥmān al-Ḥimyarī		
5	Ḥanzala b. 'Alī al-Aslamī		教友。タービュとみなされることもある。
6	Ḥuwayṭib b. 'Abd al-'Uzzā		教友。54/ 674 年没。
7	Daghfal b. Ḥanzala al-Nassāba		教友。
8	Abū Sabra Sālim b. Sabra al-Hudhalī		
9	Sa'īd b. al-Musayyib		タービュ。94/ 713 年没。
10	Samura b. Jundab		教友。60/ 679 年没。
11	Ṣa'ṣa'a b. Ṣawḥān		教友。56/ 676 年没。
12	'Āmir al-Sha'bī		タービュ。103/ 721 年没。
13	'Abd Allāh b. 'Abbās		教友。68/ 687 - 8 年没。
14	'Abd Allāh b. 'Umar		教友。73/ 693 年没。
15	'Abd Allāh b. 'Amr		'Abd Allāh b. 'Amr b. Hilāl. 教友。
16	'Abd Allāh b. Mas'ūd		教友。32/ 652 - 3 年以降に没。
17	'Abd Allāh b. Mughaffal al-Muzani		教友。57/ 677 年没。
18	<i>'Imrān b. Ḥuṣayn</i>		教友。バスのカーディー。52/ 672 年没。
19	Mu'āwiya b. Abī Sufyān		教友。ウマイヤ朝カリフ。60/ 680 年没。
20	al-Mughīra b. Shu'ba		教友。48 ~ 51/ 668 ~ 671 年頃没。
21	<i>Yahyā b. Ya'mar</i>		タービュ。メルヴのカーディー。129/ 746 年没。
22	Abū al-Aswad al-Du'alī		タービュ。バスのカーディーであったという説もある。69/ 688 年没。
23	Abū Mūsā al-Ash'arī		教友。42/ 662 - 3 年頃没。
24	Abū Hurayra		教友。58 ~ 59/ 678 ~ 679 年頃没。
25	'Ā'isha		教友。預言者の妻。58/ 678 年没。
26	Umm Salama		教友。預言者の妻。62/ 681 年没。

※ 名前はアラビア文字順。

※ 塗りつぶし(灰色)はホラーサーン関係者(移住者)。太文字・斜体はカーディー経験者。

※ 備考欄を記すにあたっては以下の史料も参照したが、煩雑になることを避けるため典拠は省略した。

Iṣāba; Jarḥ; Tah. K.; Tah. T.

※ 没年については EI² ないし al-Zirikli 1996 の記述に従った。2】である¹⁷⁾。

まずは【表1】を見てみよう。この表から読み取れることは、アブド・アッラーフにハディースを伝えたとされる人物の多くが著名な教友であったということである。さらに彼らの大半はヒジャーズ地方ないしイラク地方(バスラ、クーファ)で活動し、知られる限り

17) 本来ならば、諸ハディース集に収められたハディースのイスナードを精査することにより、【表1】【表2】で示されるアブド・アッラーフの伝承・被伝承関係を再確認せねばならない。しかし諸々の事情により本稿ではその作業を遂行できなかった。この点は今後の課題としたい。【表1】【表2】から読み取れる特徴は、具体的な数値の信憑性はさておき、一つの傾向として理解されるべきである。

【表2】 アブド・アッラーフがハディースを伝えた人物

(Tah. K., vol. 14, pp. 329 ~ 330)

	名	前	備	考
1	al-Ajlaḥ b. 'Abd Allāh al-Kindī		Kūfi. 145/ 762 年没。	
2	Bashīr b. al-Muhājir		Kūfi.	
3	Bashīr al-Kawsaj al-Naysābūrī al-Marwazī		Marwazī.	
4	Thawāb b. 'Utba		Baṣrī.	
5	Abū Bakr Jibrīl b. Aḥmar		Baṣrī or Kūfi.	
6	Ḥujayr b. 'Abd Allāh			
7	Ḥusayn b. Dhakwān al-Mu'allim		Baṣrī. 145/ 762 - 3 年没。	
8	Ḥusayn b. Wāqid al-Marwazī		Marwazī. メルヴのカーディー。 157/ 773 - 4 or 159/ 775 - 6 年没。	
9	Ḥammād b. Abī Sulaymān		Kūfi. 119/ 737 or 120/ 737 - 8 年没。	
10	Khālīd b. 'Ubayd al-'Atakī		Baṣrī. メルヴ在住。	
11	Dā'ūd b. Abī al-Furāt		メルヴの人。167/ 783 - 4 年没。	
12	Rumayḥ b. Hilāl al-Ṭā'i			
13	al-Zubayr b. Junāda al-Hajarī		Kūfi. メルヴ在住。	
14	al-Zubayr b. 'Adiy		Abū 'Adiy al-Kūfi al-Hamdānī al-Yāmī. レイの カーディー。131/ 748 - 9 年没。一説によればメル ヴに滞在したこともある。	
15	Sa'd b. 'Ubayda		Abū Ḥamza al-Kūfi al-Sulamī. 102 ~ 105/ 720 ~ 724 年の間に没。	
16	Sa'id al-Jurayrī		Baṣrī. 144/ 761 - 2 年没。	
17	Sahl b. 'Abd Allāh b. Burayda		本人の息子。メルヴ在住。	
18	Suhayl b. Abi Ṣāliḥ		Abū Yazīd al-Madanī al-Sammān.	
19	Ṣāliḥ b. Ḥayyān al-Qurashī		Kūfi. 140 ~ 150/ 757 ~ 768 年の間に没。	
20	Ṣakhr b. 'Abd Allāh b. Burayda		本人の息子。メルヴ在住。	
21	'Āmir al-Aḥwal		Baṣrī.	
22	'Āmir al-Sha'bi		この人物はアブド・アッラーフにハディースを伝え た人物でもある。【表1】12 番を参照。	
23	'Abd Allāh b. 'Aṭā' al-Makkī		Ṣāhib Ibn Burayda.	
24	Abū Ṭayba 'Abd Allāh b. Muslim al-Sulamī al-Marwazī		Marwazī. メルヴのカーディー。	
25	'Abd al-Jalīl b. 'Aṭīya		Baṣrī.	
26	'Abd al-Karīm b. Salīḥ al-Baṣrī		Marwazī. バスラ在住。	
27	'Abd al-Mu'min b. Khālīd al-Ḥanafī		Marwazī. メルヴのカーディー。Ṣāhib 'Abd Allāh b. Burayda.	
28	Abū Mālik 'Ubayd Allāh b. al-Akhnas		al-Kūfi al-Nakha'i al-Khazzāz.	
29	Abū al-Munīb 'Ubayd Allāh b. 'Abd Allāh al-'Atakī		Marwazī.	
30	'Ubayd Allāh b. al-'Ayzār		Baṣrī.	
31	'Uthmān b. Ghiyāth		Baṣrī.	
32	'Aṭā' b. al-Sā'ib		al-Kūfi al-Thaqafī. 136/ 753 - 4 年没。	
33	'Aṭā' al-Khurāsānī		バルフの人。135/ 752 - 3 年没。	
34	'Alī b. Suwayd b. Manjūf al-Sadūsī		Baṣrī.	
35	'Umāra b. Abī Ḥafṣa		al-Baṣrī al-Azdī al-'Atakī. 132/ 749 - 50 年没。	
36	'Amr b. Abī Ḥakīm al-Wāsiṭī			
37	'Isā b. 'Ubayd al-Kindī		Marwazī.	
38	Fā'id Abū al-'Awwām		Baṣrī.	

【表2】 アブド・アッラーフがハディースを伝えた人物（続き）

(Tah. K., vol. 14, pp. 329 ~ 330)

	名	前	備	考
39	Qatāda		Ibn Di'āma al-Baṣrī al-Sadūsī. 117/735-6 or 118/736-7 年没。	
40	Kahmas b. al-Ḥasan		Baṣrī. 149/766-7 年没。	
41	Mālik b. Mighwal		Kūfi. 158 ~ 159/775 年没。	
42	<i>Muḥārīb b. Dithār</i>		Kūfi. クーフアのカーディー。 116/734-5 年没（諸説あり）。	
43	Abū Hilāl Muḥammad b. Sulaym al-Rāsibī		Baṣrī. 167/784 or 169/785 年没。	
44	Maṭar al-Warrāq		Abū Rajā' al-Khurāsānī. バスラ在住。 125/742-3 or 129/746-7 年没。	
45	Mu'āwiya b. 'Abd al-Karīm al-Thaqafī		Baṣrī. アブド・アッラーフからの最後の伝承者。 180/796-7 年没。	
46	al-Mughira b. Subay'			
47	Muqātil b. Ḥayyān		バルフ在住。150/767-8 年以前に没。	
48	Muqātil b. Sulaymān		Balkhī. 150/767-8 年没。	
49	al-Mundhir b. Tha'laba al-'Abdī		Baṣrī.	
50	Maymūn Abū 'Abd Allāh		Baṣrī.	
51	al-Walīd b. Tha'laba al-Ṭā'ī		Baṣrī.	
52	Yazīd b. Ḥayyān		Balkhī. 前出 47 番の兄弟。	
53	Yazīd b. 'Uqba al-'Atakī		Marwazī.	
54	Yazīd al-Naḥwī		Marwazī. 131/748-9 年没。	
55	Yūsuf b. Ṣuḥayb		Kūfi.	
56	Abū Rabī'a al-Iyādī		'Amr b. Rabī'a.	
57	Abū Hāshim al-Rummānī		Yaḥyā b. Dīnār. 122/739-40 or 145/762-3 年没。	

※ 名前はアラビア文字順。

※ 塗りつぶし（灰色）はホラーサーン関係者。太文字・斜体はカーディー経験者。

※ 備考欄を記すにあたっては以下の史料も参照したが、煩雑になることを避けるため典拠は省略した。

Jarḥ; Mashāhir; T. Is.; Tah. K.; Tah. T.; Thiḡāt

でホラーサーンとは無縁であった。このことから、彼が「預言者の言行」等の諸知識を得たのは主にバスラ在任期であったことが推測される¹⁸⁾。

続いて【表2】を見てみよう。この表において、上記【表1】との比較の上で最も興味深い点は、ホラーサーン、特にメルヴの出身者（あるいは在住者）が比較的多いということである。少なくともメルヴ関係者だけで16人、ホラーサーン全域なら19人おり、その人数は全体の33%に達する。つまりアブド・アッラーフは、著名な教友とホラーサーンのラーウィーとをつなぐ橋渡し役を担ったことになる。このことは、彼が父ブライダらとともに最も早くホラーサーンへ「預言者の言行」を伝えたことを示唆している。同時にこのことは、ホラーサーンにおけるハディースの一伝承元として彼が後世のウラマーの信頼を集めていた

18) あるハディースによれば、アブド・アッラーフは父ブライダとともにカリフ、ムアーウィヤと会談した [T. Di. 27: 126-27; T. Is. ḥ. 101-120: 394; Siyar 5: 52]。このことから、彼は父の仲介を通じて教友たちに接触したと類推される。

ことを物語っている。

なお、【表2】中で挙げられる23および27の人物は、「アブド・アッラーフの徒 (ṣāhib ‘Abd Allāh b. Burayda)」として知られている [T. Ya. 2 : 277; Mashāhir : 310]。この表現は「(ハディースの伝承において) アブド・アッラーフに従う者」という意味を持つと考えられ、「アブド・アッラーフ派」とも言うべき人々の存在を示している。史料によっては「ムンカル」¹⁹⁾と判断されることもあり²⁰⁾、必ずしも信頼できるラーウィーとはみなされないアブド・アッラーフであるが、少なくともホラーサーンにおいては彼の伝えるハディースは信頼を得ていたと言える²¹⁾。

2 カーディーとして

A) 「3種の^{カーディー}裁き手」ハディースの伝承

アブド・アッラーフを通して伝えられたとされるハディースの中に、以下のものがある [Sunan A. 3 : 288-89]。

(Muḥammad b. Ḥassān al-Samtī ← Khalaf b. Khalīfa ← Abū Hāshim ²²⁾ ← Ibn Burayda ← Abī (Burayda))

彼(預言者)曰く、「^{カーディー}裁き手たる者に3種あり。うち1種は天国へ行き、2種は地獄へ行く。天国へ行く裁き手とは、真実を知り、それをもって裁く者。真実を知りつつ、裁決において逸脱する者は地獄へ行く。また無知にして人のために裁く者も地獄へ行く。(al-quḍāt thalātha wāḥid fī al-Janna wa ithnāni fī al-Nār fa-‘ammā alladhī fī al-Janna fa-rajul ‘arafa al-ḥaqq fa-qaḍā bi-hi wa rajul ‘arafa al-ḥaqq fa-jāra fī al-ḥukm fa-huwa fī al-Nār wa rajul qaḍā li-al-nās ‘alā jahl fa-huwa fī al-Nār)」

このハディースはカーディーの心得——具体的にはカーディーによるイジュティハードの可謬性とその是非——を示しているときみなされ、ハディース集、法学書等でしばしば引用

19) ムンカルとは「異論の余地あるハディースないしハディース伝承者」を意味し、一般的にハディース偽造に関わるとみなされる。「家族イスナード (family isnāds)」を持つハディース——すなわち、ある人物からその子、孫へと伝えられるハディース——もムンカルとして疑われた。その代表例が、預言者→ブライダ→アブド・アッラーフというイスナードを持つハディースである [EP: “MUNKAR”]。

20) 例えば ‘Ilai [2 : 22] を参照。

21) Tah. T. [5 : 158] に引用された記述からは、メルヴの人々がいかにアブド・アッラーフ経由のハディースを信用していたかということがわかる。

なおジュインボール (G. H. A. Juynboll) は、初期イスラーム時代の染髪に関する論文の中でアブド・アッラーフに触れている [Juynboll 1986]。それによれば、当時、髪やひげを染めることに関しては法学上の論争があり、その中で、アブド・アッラーフの伝えたハディースが染髪擁護の根拠とみなされていたという。

22) この人物は【表2】中の「57, Abū Hāshim al-Rummāni」である。

された[Adab: 33-34; Sunan M. 2 : 776; Sunan T. 2 : 65; Awsaṭ 4 : 377-78, 7 : 388, 402-403]²³⁾。アブド・アッラーフを通してこの「預言者の言葉」が伝えられたことは、彼とカーディー職とを結びつける一接点となっており興味深い。

より興味深いことに、このハディースには内容の若干異なる別バージョンが存在した。それを以下に引用してみよう [AQ 1 : 15]。

(Abū Ja'far Muḥammad b. Šāliḥ ← Jubāra ← 'Abd Allāh b. Bukayr ← Ḥakīm b. Jubayr²⁴⁾ ← 'Abd Allāh b. Burayda)

ヤズィード・ブン・アルムハッラブ (Yazid b. al-Muhallab) は私 (アブド・アッラーフ) をホラーサーンのカーディーの任 (qaḍā' Khurāsān) に就けようと望んだ。そのことが私を悩ませた。そこで私は次のように言った。「神に誓って[私はカーディーに]なりません。かつて我が父(ブライダ)は神の使徒から以下の言葉を聞き、それを私に伝えました。すなわち『^{カーディー}裁き手たる者に3種あり。うち2種は地獄に行き、1種は天国に行く。[真実を]知り、それ(真実)をもって裁く裁き手は、天国の人間に含まれる。真実を知るも故意に逸脱する裁き手は、地獄の人間に含まれる。知識なしに裁き、「私は知らない」と言うことを恥じる裁き手もまた、地獄の人間に含まれる。』²⁵⁾」

一見してわかるとおり、このバージョンにはアブド・アッラーフ自身の語る状況説明が補

23) 上記史料のいずれの場合も、イスナード中にイブン・ブライダ(=アブド・アッラーフ)の名前が登場する。(Adabには「イブン・アビー・ブライダ」とあるが、アブド・アッラーフを指しているともないうる。)

AQ [1 : 13-19] にはこのハディースが13回引用されており、13回それぞれが異なるイスナードを有する。このうち伝承者にイブン・ブライダないしアブド・アッラーフ・ブン・ブライダを含むものは5回あり、含まない他の8回においては同じタービュが3回以上登場することはない。なお上記8回のうち4回はマトンを(預言者でなく)アリー('Alī b. Abī Ṭalīb)の言葉とする。

現時点で筆者が把握している限りでは、このハディースの引用は計9史料24回に及ぶ(註25も参照のこと)。このうち16回でイブン・ブライダないしアブド・アッラーフの名前が登場する。イスナード中のアブド・アッラーフより後世代の伝承者に関しては際立った特徴は見られない。

このハディースに登場する al-quḍāt (al-qāḍī の複数形) という単語は、『コーラン』においては非限定単数形 (qāḍin) の形で1回(20章72節)、限定女性形 (al-qāḍiya) の形で1回(69章27節)登場する。同書において語根 q-ḍ-y は「(特に神が) 決める・定める」、「満たす・果たす・終える」、あるいは「裁く」の意味で用いられる。ハディース中の単語の用法についてはさらに分析を必要とするが、この「預言者の言葉」がアブド・アッラーフの時代に存在したこと自体に問題はないように思われる。

24) 【表2】中にはこのḤakīmに相当する人物は見当たらない。

25) Ma'rifa 'U. [98-99], Qand [683], T. Di. [27 : 136-37] にも同バージョンの「3種の裁き手」ハディースが引用されている。ただしこれら3史料中のものは、本文で引用したAQ中のものと内容面で若干異なっている。以下註26、註27も参照のこと。

なお、上記註23で指摘した16回のうち、5回はこの「アブド・アッラーフのカーディー就任拒否逸話」を含む長文バージョンである。

記されている²⁶⁾。

この「彼自身による説明」には重大な問題がある。説明によれば、彼はヤズィード（ホラーサーン総督。任期、第Ⅰ期 82～85/702～704年、第Ⅱ期 97～99/715-6～717年。）にカーディー就任を求められたものの断った、とある²⁷⁾。ところが多くの史料は、彼がある時期メルヴのカーディーであったことを証言している。しかもそれらの証言のうち最も信用できるものは、このヤズィードを彼の任命者とみなしているのである（下記第Ⅱ章第2節Bを参照。）。従って、この説明部分からは、

- ① 彼は「預言者の言葉」に従って自分自身をカーディー適任者でないと考えていた（が、ホラーサーン総督によって強引にカーディーにさせられた）。
- ② 彼は（「預言者の言葉」以外の）何らかの理由によりカーディーとなることを嫌悪していた（が、ホラーサーン総督によって強引にカーディーにさせられた）。
- ③ この説明部分自体が、後世のウラマーにより偽造されたものである。

という3つの可能性を読み取ることができる。

結論から言えば、この説明部分は偽造された可能性が極めて高い²⁸⁾。しかし真相如何に関わらず注目すべきことは、このハディースが一種の「理想のカーディー」像を提案しているという点である。そして父ブライダを通して上記ハディースを伝承し、かつカーディー在職経験もあったアブド・アッラーフは、この「理想のカーディー」像に最も近い存在であったと言えよう。だからこそ真偽の疑わしい彼の「カーディー就任拒否」逸話も、無視されえない存在価値を持ちえたのである。

26) ただし上記註25で指摘した3史料 (Ma'rifa 'U.; Qand; T. Di.) においては、この状況説明部分は一人称の文体ではなく三人称の文体である。

27) ただし上記註25で指摘した3史料 (Ma'rifa 'U.; Qand; T. Di.) においては、アブド・アッラーフにカーディー就任を要請した人物はクタイバ・ブン・ムスリム（ホラーサーン総督。任期 86～96/705～15年。）である。

28) Ma'rifa 'U. の著者ハーキム・アンナイサーブリー (al-Ḥākim al-Naysābūrī, 405/1014年没。) は、このハディースを引用した後、以下の記述を書き加えた。

これはホラーサーンの人々のみが伝承したハディースである。というのも、彼ら（イスナード中の伝承者）以外からこのハディースを伝承した人々も、メルヴ出身者 (Marāwiza) だからである。

この記述から判断すれば、「アブド・アッラーフのカーディー就任拒否逸話」はホラーサーンのウラマーによって偽造された可能性が高い。ジュインボールは、この逸話が数ある「反裁判官職スローガン (anti-judgeship slogans)」の1つであることを指摘し、それがミフナの時代 (218～34/833～48年。) に生まれたのではないかと推測する [Juynboll 1983: 94]。

なお、ヒジュラ暦1～4世紀の各地のウラマーが示した「カーディー就任拒否」の姿勢とその背景を分析した研究として Coulson 1956 がある。

B) カーディー任期

ここで、あらためて【表1】および【表2】を見てみよう。この2つの表から、もう1点、指摘すべきことがある。それはカーディー経験者の存在である。【表1】においては2人(22番の人物を含めれば3人)、【表2】においては5人がカーディー経験者である。さらにその7人のうち、4人はメルヴのカーディーなのである。このことは彼自身がメルヴのカーディーであったことと無縁ではあるまい²⁹⁾。

アブド・アッラーフをカーディーとして紹介する最初の史料は、ブハーリー(al-Bukhārī, 256/870年没。)のT. Ka.である。それ以前の史料では彼のことをカーディーと記す記述は存在しない³⁰⁾。T. Ka.以降の史料では、人名録、人名辞典、一部の年代記においてそのような記述が見うけられる。それらの史料を一覧にしたのが次頁【表3】である。なお、アブド・アッラーフの兄弟スライマーンもカーディーであったとみなされる場合がある。【表3】では、スライマーンをカーディーと記す史料についても併記した。後者の場合、カーディーとして紹介される最初の史料はThiqātということになる。

さて、【表3】に挙げた史料の中には、アブド・アッラーフがカーディーであった時期を記しているものもある。以下ではそれらの記述に基づき、その時期について検討することにして、記述内容は、大きく分けて3つの説に分類される。

〔ヒジュラ暦105年(西暦723-4年)引継ぎ説〕

T. Di. 中の引用記事に以下のような一節がある [T. Di. 27: 139]。

メルヴにおいてカーディーの任にあったスライマーン・ブン・ブライダは、105年に当地で没した。彼の後、彼の兄弟(アブド・アッラーフ)が当地におけるカーディーの任に据えられた。彼(アブド・アッラーフ)は、115/733-4年に没するまで、メルヴにおけるカーディーの任にあった。

これによれば、カーディーであったスライマーンが105年に没した後、兄弟の職を引き継ぐ形でアブド・アッラーフがカーディーになった、という。ただしスライマーンが任命された時期、ならびに彼ら2人を任命した人物は不明である。

この説には問題点が2つある。まず1つは、年齢についてである。上記の説に従えば、彼

29) *Kitāb al-Maghāzī* の著者で、バグダードのカーディーであったワーキディー (Abū 'Abd Allāh Muḥammad b. 'Umar al-Wāqidi, 207/823年ごろ没。)がアブド・アッラーフ・ブン・ブライダのマウラー(「被護民」)であった、という記述もある [Ṭa. Ku. 7: 334]。この内容は虚構であろうが、アブド・アッラーフと他のカーディー経験者とのつながりを示している点では興味深い一例だといえる。ワーキディーはアスラム族の出身であり、アブド・アッラーフとは同族であった。この点も上記記述の形成に関連していると考えられる。

30) T. Ka. より古い史料では、T. Ya., Ṭa. Kha., Ṭa. Ku. など彼に関する記述が見うけられるが、いずれも情報量は僅かである。なお T. Kha. [235] にバスラのカーディーとして登場する 'Abd Allāh b. Burayda al-Aslamī は 'Abd Allāh b. Yazīd al-Aslamī の間違いである。

【表3】 'Abd Allāh b. Burayda と Sulaymān b. Burayda をカーディーと記している史料の一覧

	史料	著者没年	'Abd Allāh	Sulaymān	備考
①	T. Ka.	256/ 870年	◎ vol. 5, p. 51	△ vol. 4, p. 4	
②	Jarḥ	327/ 939年	◎ vol. 5, p. 13	△ vol. 4, p. 102	
③	AQ	330/ 941年	◎ vol. 3, pp. 306, 322	×	厳密に言えば、本史料において 'Abd Allāh は「カーディー」とは記されていない。しかし実質的に「ホラーサーンのカーディー」として扱われている。
④	Mashāhir	354/ 965年	◎ p. 202	△ p. 202	
⑤	Thiqāt	354/ 965年	◎ vol. 5, pp. 16 ~ 17	◎ vol. 4, p. 303	Sulaymān に関しては、「彼はメルヴのカーディーの任にあったと言われている。」と伝聞調に記されている。
⑥	Jam'	507/ 1113年	◎ vol. 1, p. 247	△ vol. 1, p. 185	
⑦	Ansāb	562/ 1166年	○ vol. 4, p. 404	◎ vol. 4, p. 404	
⑧	T. Di.	571/ 1176年	◎ vol. 27, p. 125 ~ 139	○ vol. 27, p. 139	'Abd Allāh の説明記事は先行史料からの引用で構成。そのうち、彼を「カーディー」と記す引用が8つ（うち上記史料①、②からの引用が各1）、Sulaymān を「カーディー」と記す引用（Abū Ḥātim Muḥammad b. Ḥibbān al-Bustī から）が1つ掲載されている。
⑨	Kāmil	630/ 1233年	◎ vol. 5, p. 180	×	h. 114年の死亡記事。
⑩	Lubāb	630/ 1233年	×	◎ vol. 2, p. 443	史料自体は上記史料⑦の要約版。
⑪	Tah. K.	742/ 1341年	◎ vol. 14, pp. 328~332	● vol. 11, pp. 370~372; vol. 14, p. 332	Sulaymān を「カーディー」とする記述は Abū Ḥātim b. Ḥibbān (al-Bustī) からの引用。
⑫	T. Is.	748/1348 or 753/1352-3年	◎ h. 101~120, pp. 393~395	● h. 101 ~ 120, pp. 97 ~ 98, 395	Sulaymān を「カーディー」とする記述は Ibn Ḥibbān (al-Bustī) からの引用。
⑬	Tah. T.	852/ 1449年	◎ vol. 5, pp. 157~158	◎ vol. 4, pp. 174 ~ 175; vol. 5, p. 158	Sulaymān に関しては、彼の説明記事の中で上記史料⑤の文が引用される。また 'Abd Allāh の説明記事の中でも、Ibn Ḥibbān (al-Bustī) から文が引用され、'Abd Allāh と Sulaymān がともに「カーディー」であったことが記述されている。

◎：彼に関する説明記事があり、その中で彼が「カーディー」として記されている。

○：彼に関する説明記事はないが、他の人物の説明記事の中に彼を「カーディー」と記す一節がある。

●：彼に関する説明記事はあるが、その中で彼は「カーディー」とは記されていない。ただし他の人物の説明記事の中に彼を「カーディー」と記す一節がある。

△：彼に関する説明記事はあるが、その中で彼は「カーディー」とは記されていない。

×：彼に関する説明記事がなく、他の人物の説明記事の中にも彼を「カーディー」と記す一節は見られない。

は90歳から100歳まで（西暦換算では87-8~97歳）の高齢期にカーディーであったことになる。常識的に言ってこの点は不自然である。もう1つの問題は、スライマーンが本当にカーディーであったかどうか、という点である。【表3】を見ればわかるように、スライマーンをカーディーと記す史料はアブド・アッラーフの場合よりも少ない。またカーディーと記す史料においても、スライマーン自身の紹介記事の中ではカーディーと記されない場合がある（Tah. K. および T. Is.）。従ってスライマーンがカーディーであったか否かは、現時

点では確定されえない。以上のような点から、この「引継ぎ」説は信憑性を欠いている³¹⁾。
〔ムハッラブ任命説〕

西暦12世紀前半、メルヴ出身のアーリム、サムアーニー (al-Sam'āni, 562/1166年没。)は、アブド・アッラーフのカーディー就任に関して他史料にない独自の記述を書き残した [Ansāb 4 : 404]。

彼 (スライマーン・ブン・ブライダ) はムハッラブ・ブン・アビー・スフラ (al-Muhallab b. Abī Šufra) の時代、カーディーの任にあった。彼 (スライマーン) は彼 (ムハッラブ) に辞任を願い出、彼は彼を解任した。そしてその任に彼の兄弟アブド・アッラーフを据えた³²⁾。

基本的にはこの記述も「引継ぎ」説に分類されうるが、任命者を特定している点、およびスライマーンの辞任を指摘している点で上記の説と異なっている。辞任の正確な時期、およびアブド・アッラーフの任期については不明である。

この説は、ホラーサーン総督ムハッラブ (任期79~82/698~702年。)を任命者としている点で問題がある。残念なことに、ムハッラブを任命者とする記述は Ansāb 以外の史料には存在しない。可能性から言えば彼が任命したことは十分に考えられるが、他の史料から裏付けが得られないため、現時点ではこの説を積極的に受け入れることはできない。ただし、Ansāb 中の記述は失われた『メルヴ史』から引用されている場合があり³³⁾、この記述もその可能性がある。スライマーンのカーディー辞任に言及している点から言っても、この記述は貴重である。

〔ヤズィード任命説〕

任命者を明記する史料としては、前述した Ansāb 以外に、Mashāhīr, Thiqāt, T. Di. ,

31) なおこの「引継ぎ」説は他の3史料にも見うけられる [Tah. K. 14 : 332; T. Is. h. 101-120 : 395; Tah. T. 5 : 158]。T. Di. を含む4史料中の記述は、いずれもイブン・ヒッバーン・アルブスティーからの引用である。

32) Ansāb の要約版たる Lubāb でも同様の記述が見うけられるが [Lubāb 2 : 443]、カーディー職引き継ぎを示す後半部分は省略されている。

33) 佐藤明美によれば、『メルヴ史』はかつて5種類存在した [佐藤 1994 : 28]。セズギンはうち3種類の著者名を記している [Sezgin 1967 1 : 351-52]。サムアーニーが参照したと考えられる『メルヴ史』は、少なくとも以下の3種類である。

① Abū al-'Abbās Aḥmad b. Sa'īd b. Aḥmad b. Ma'dān (375/986年没。),

Ta'riḫ al-Marāwiza (例えば Ansāb [2 : 13, 3 : 382] を参照。)

② Abū Rajā' Muḥammad b. Ḥamdawayh al-Hūrqānī (306/918年没。),

Ta'riḫ al-Marāwiza (例えば Ansāb [1 : 320, 5 : 656] を参照。)

③ Abū Zur'a al-Sinjī, *Ta'riḫ li-Marw* (例えば Ansāb [5 : 77] を参照。)

中でも①は多くの箇所では情報元として登場する。サムアーニーが引用する書物に関しては Камалиддинов 1993 [16-18] も参照のこと —— この研究書は井谷鋼造氏が所蔵されており、筆者は氏の御好意により参照することが出来た。ここに謝意を表したい。——

T. Is. の 4 史料が挙げられる。それらが一致するところによれば、任命者は上記ムハッラブの息子ヤズィード（前出のホラーサーン総督。任期、第 I 期 82～85/702～704 年、第 II 期 97～99/715-6～717 年。）であった [Mashāhīr: 202; Thiqāt 5: 16-17; T. Di. 27: 129, 137; T. Is. h. 101-120: 395]。このことから、現時点ではヤズィード任命説を受け入れるのが妥当である。

T. Di. には、ヤズィード任命を裏付ける記述が 2 つ引用されている。そのうちの 1 つが以下の記述であり、ヤズィード任命説の中で最も具体的な内容を含む。

彼（アウス・ブン・アブド・アッラーフ・ブン・ブライダ）は言った。「アブド・アッラーフ・ブン・ブライダは 24 年間メルヴのカーディーであった。彼はカーディーの任にあってリズク（al-rizq, ムカーティラに支給された「食糧品」を指す。）を得ていた。かつてヤズィード・ブン・アルムハッラブが彼をカーディーに任命し、アサド・ブン・アブド・アッラーフ（Asad b. ‘Abd Allāh）の統治期までカーディーであり続けた。」

アブド・アッラーフの子、アウス（Aws b. ‘Abd Allāh b. Burayda, 202/817 年以降没。）が語ったとされるこの逸話によれば、彼は 24 年もの間メルヴのカーディーであったという³⁴⁾。ここで登場するアサドという人物もホラーサーン総督（任期、第 I 期 106～09/724-5～727-8 年、第 II 期 117～20/735～738 年。）であったが、ヤズィードの総督第 I 期目とアサドの総督第 I 期目の間は最短で 22 年、最長で 28 年である。上記の 24 年という数字はこの条件を満たしていることになる。従って、両ホラーサーン総督の総督第 I 期目の間を、彼がカーディーであった時期と推定することができる。

ただし、クタイバ・ブン・ムスリム（前出のホラーサーン総督。任期 86～96/705～15 年。）がヤフヤー・ブン・ヤーマル（Yaḥyā b. Ya‘mar, 129/746 年没。）をメルヴのカーディーに任命したとする記述 [Mashāhīr: 203; T. Is. h. 81-100: 502; Tr. Wa. 4: 59-62] や、ジャッラーフ（al-Jarrāḥ b. ‘Abd Allāh, ホラーサーン総督。任期 99～100/717-8～719 年。）がアブド・アッラーフを解任し、アブー・ウスマーン・アルアンサーリー（Abū ‘Uthmān al-Anṣārī, 没年不詳。）をカーディーにしたとする記述 [T. Di. 27: 130] が存在する。従ってアブド・アッラーフがその期間連続してカーディーであったとは考え難く、上記逸話も全幅の信頼を置けるものではないことがわかる。

以上、アブド・アッラーフのカーディー就任に関する 3 説を検討してきたが、結論は以下の 2 点である。

34) アウスは、この話を兄弟サフル（Sahl）や母親、彼の家の人々（ahl bayt-i）などから聞いたという。彼はアブド・アッラーフの晩年の子であったため、父から直接はハディースを伝承しなかった。なお彼は、ラーウィーとしては信頼度の低い人物とみなされていた [T. Ka. 2: 17; Du ‘afā’: 67]。

- ① アブド・アッラーフをカーディーに任命したのは、ホラーサーン総督ヤズィード（ないしはその父ムハッラブ）であった。
- ② 彼の正確なカーディー任期は不明であるが、おそらくヤズィードの総督1年目からアサドの総督4年目までの間（82/702年～109/727-8年）のある時期（それもかなり長期）であった。

これら2点を踏まえた上で、さらにもう1点、指摘すべきことがある。それは、メルヴにおいてアブド・アッラーフ以前にカーディーであった者は存在しない、ということである³⁵⁾。つまり現時点で知られている限りでは、彼はメルヴ史上「初の」カーディーだったのである。

前述したように、彼はラーウィーとして、カーディーの心得を説くハディースを伝えている。また、ハディース伝承の過程においては、他のメルヴのカーディー4人——うち1人は「アブド・アッラーフの徒」。——とも繋がりを持った。これらのことを考え合わせれば、ウマイヤ朝期からアッバース朝初期のメルヴにおいて、彼が他のカーディーにとっての模範的存在であったことは疑う余地がない。

C) カーディー、アブド・アッラーフの実像

ワキーウ（Waki', 330/941年没。）は『カーディー伝』AQの中で以下の記述を残している [AQ 3 : 306]。

ウマイル・ブン・ウクバ（'Umayr b. 'Uqba）は言った。「私はアブド・アッラーフ・ブン・ブライダがロバに乗って村々をまわり、人々の間で裁いているのを見た。」この記述においては、後世に見られるようなモスクで裁くカーディー像ではなく、カーディー職創成期の調停役に似た姿を見出すことができる³⁶⁾。

しかし残念なことに、上記の記述以外でカーディー、アブド・アッラーフ像を示す証言は

35) スライマーンのカーディー就任については立証が不可能であるため、現時点ではこのように指摘できる。

Juynboll 1983 [229, 230] には「ウマイヤ朝期およびアッバース朝初期におけるホラーサーンおよびメルヴのカーディー」がリストアップされている。ジュインボールはアブド・アッラーフを「ホラーサーンのカーディー」として挙げる。しかしAQ以外の史料は彼を「メルヴのカーディー」と記しており、本稿では「メルヴのカーディー」に統一した。この違いに関しては現在調査中である。

36) この記述中の「アブド・アッラーフが～村々をまわり」という表現は、アラブ移住者が都市メルヴ近郊の村々に居住していたことを表している。移住アラブの居住状況に関してはShaban 1970 [20-21] を参照。実はブライダ家自体も、村々に居を構えていた。アブド・アッラーフの墓があったジャーワルサ村、およびスライマーンの墓があったファニー村には、彼らの子孫が住んでいた [T. Di. 27 : 131]。またメルヴには、アブド・アッラーフの息子サフルの名を冠するサフルバーズ（Šakhrābādh）という村もあった [Ansāb 3 : 525 ; MB 3 : 448]。これらの点から、ブライダ家と村々との密接な関係を推測することもできる。

見当たらない。またこの時期のメルヴのカーディーに関しては不明な点も多く、本稿ではこれ以上彼のカーディーとしてのあり様に言及することはできない。今後、アブド・アッラーフに限らずメルヴのカーディー全般を対象にし、地域社会の中で彼らがどのような立場にあったのか、あるいはカーディー職が制度としてどの程度整備されていたのか、などの点を検討していく必要がある³⁷⁾。

III アブド・アッラーフ没後の彼にまつわる事象

1 アブド・アッラーフ墓参詣

115/733-4年、メルヴ地域のジャーワルサ (Jāwarsa) 村³⁸⁾にて、アブド・アッラーフはこの世を去った [Thiqāt 5 : 16-17; Mashāhīr : 202; T. Di. 27 : 130, 139; Tah. K. 14 : 332; T. Is. ḥ. 101-120 : 395; Tah. T. 5 : 158]³⁹⁾。史料に記された生没年を信用すれば、彼は100年 (西暦換算では97年) の長寿を全うしたことになる。亡骸は同村に埋葬され、後にその墓は人々の参詣を受けることになった。

参詣行為の開始時期については明らかではないが、墓の場所を記す史料のうち最も古いものがイブン・ヒッバーン・アルブスティー (Ibn Hibbān al-Bustī, 354/965年没。) のThiqātであることから、少なくとも西暦10世紀にはすでに参詣されていたと推定される。

12世紀になると、メルヴ出身のサムアーニーが以下の一節を書き残した [Ansāb 2 : 13]。

ジャーワルスィー (al-Jāwarsī) : ~中略~ このニスバはジャーワルサに [由来する]。それはメルヴから3ファルサフ (約18 km) の位置にある村である。そこにはアブド・アッラーフ・ブン・ブライダの墓 (qabr) がある。メルヴとその地域 (al-nawāḥi) の人々は、バラアアの夜にそのもとへと集まる⁴⁰⁾。

サムアーニーはアブド・アッラーフ墓以外にもメルヴ地域内の墓参詣事情について触れている⁴¹⁾。しかしアブド・アッラーフ墓への参詣は、メルヴの人々を巻き込んだ一大行事であっ

37) ウマイヤ朝期からアッバース朝初期にかけてのカーディーについては、Schachat 1964 [23-48], Juynboll 1983 [77-95] を参照。

38) この村についてはMB [2 : 112] を参照。

39) T. Di., Tah. K., T. Is., Tah. T. 中に見られる彼の没年情報は、全てイブン・ヒッバーン・アルブスティーからの引用である。

なお、アブド・アッラーフの死に関しては、「双子の兄弟アブド・アッラーフとスライマーンは同じ日に生まれ、同じ日に亡くなった」という記述も残されている [Jamhara : 240; Tah. K. 14 : 332; Tah. T. 4 : 174]。この内容は明らかに虚構であるが、彼の死を特徴付けようとする意図が窺われ興味深い。

40) 「バラアアの夜」はシャーバーン月15日夜、あるいはその時行われる祭を意味する。詳しくはE²: "BARĀ'A" を参照。

41) 例えば Ansāb [2 : 497, 3 : 145, 197, 257, 318, 4 : 358, 377, 5 : 76, 636] を参照。この内の半数以上に、サムアーニー自身が参詣を行っている。

たという点で他に類を見ないものであった⁴²⁾。

2 彼の子孫たち

アブド・アッラーフには4人の息子がいた(次頁【系図】を参照)。そのうちジャミールを除く3人はラーウィーとして知られ、人名録中にも紹介記事が見つかる(【系図】に付した「注記」を参照)。さらに政治分野においても、彼らは足跡を残した。メルヴは「アッバース朝革命」発祥の地として有名であるが、アブド・アッラーフの息子や孫も革命運動とは無縁ではありえなかった。

遡って98/717年、すなわちアブド・アッラーフがカーディーであったと推測される時、メルヴの「アッバース家運動(Da'wa al-'Abbāsīya)」が開始された[Sharon 1983: 149]⁴³⁾。この運動には早くから父ブライダのマウラー(「被護民」)、イーサー・ブン・アーヤン(Īsā b. A'yan, 没年不詳。)やアムル・ブン・アーヤン('Amr b. A'yan, 没年不詳⁴⁴⁾)らが参加していた⁴⁵⁾。さらにT. Di.の記述によれば、アブド・アッラーフの孫の一人、ハンマード・ブン・サフル(Ḥammād b. Ṣakhr b. 'Abd Allāh b. Burayda, 没年不詳。)も参

42) なおアブド・アッラーフ墓ばかりでなく、父ブライダの墓——前出のジャッスィーン墓地に存在。——や兄弟スライマーンの墓——ファニン村に存在。——も人々の参詣を受けたようである。

ブライダの墓に関しては、参詣を受けていたことを示す確たる証拠は史料中には見当たらない。しかし墓の場所についての情報が史料に頻出すること、および彼の墓の隣にあった教友ハカム(al-Ḥakam b. 'Amr al-Ghifārī, 45～51/665～672年ごろ没。)の墓が参詣されていたこと[Ansāb 4: 305]などを考慮すれば、参詣行為が存在したとみて間違いない。

一方、スライマーンの墓に関しては、Ansābに以下の記述がある[Ansāb 4: 404]。

それ(Fanin)はメルヴ村落中の一村で、[都市]メルヴから3ファルサフ(約18km)の位置にある。そこにはスライマーン・ブン・ブライダの墓がある。～中略～彼の墓はよく知られており、参詣される。

43) 「アッバース朝革命」研究の概要に関してはHumphreys 1991 [104-27], Daniel 1996 [150-58]を参照。

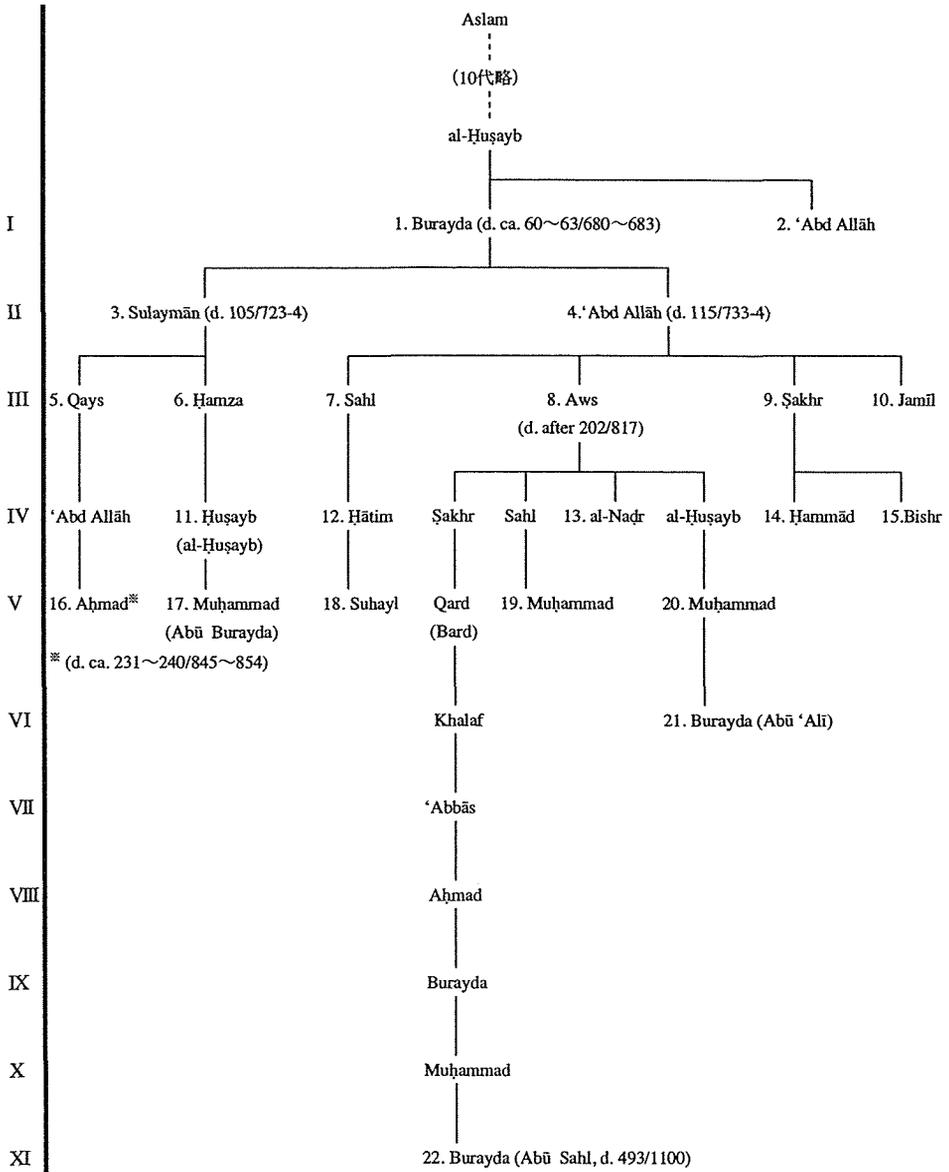
ホラーサーンにおける革命運動の指導者は当初スライマーン・ブン・カスィール・アルフザイー・アルアスラミーであった[AD'A: 216]。革命運動組織には、このスライマーンを筆頭にフザア族出身者が多かった[余部 1983: 72; Daniel 1979: 35]。この点を考慮すれば、アスラム系ブライダ家の革命運動参加は自然な流れであったといえる。

44) Qandには142/759-60年没とあるものの[Qand: 613], 検討の余地がある。なお同史料は、アムルをサマルカンドの人間とみなす。

45) AD'A [216]はイーサーをブライダのマウラーと記し、Ansāb [4: 404]はアムルをブライダのマウラーと記す。マウラーという語に関しては嶋田襄平の一連の研究を参照のこと。

なおAnsāb同箇所によれば、イーサーおよびアムルは両者ともファニン村の出身であった。すでに述べたように(上記註36, 註42), この村はスライマーン・ブン・ブライダの墓の所在地であり、ブライダ家の居住地であった。また、後にアブー・ムスリムがこの村に滞在し、革命運動の指揮権をめぐってスライマーン・ブン・カスィールと交渉したことも知られている[Sharon 1990: 70-72]。ブライダ家と革命運動の密接な関係を傍証している点で、この村の存在は重要である。

【ブライダ家系図】



系図注

※ 名前の前に数字が付されていない人物は、後世代の人物のナサブからのみ存在が確認される者である。

※ 系図の根拠について。

- ① 1. ブライダ, 3. スライマーン, 4. アブド・アッラーフの系譜に関しては, Nasab [2: 144-145] を主要根拠とする。3人の没年は Mashāhir [101, 202] の記述に基づく。
- ② ①以外の人物に関しては, 以下のとおりである。
 2. アブド・アッラーフ: T. Ni. [69]
 5. カイス: T. Di. [27: 131]
 6. ハムザ: T. Di. [27: 131]
 7. サフル: Jamhara [240], Jarḥ [2: 305], T. Di. [27: 130-131], T. Is. [ḥ. 191-200: 113, ḥ. 201-210: 70], Tawḍīḥ [1: 476, 2: 371]
 8. アウス: Jamhara [240], Jarḥ [2: 305], T. Di. [27: 130-131], T. Is. [ḥ. 191-200: 113, ḥ. 201-210: 70], T. Ka. [2: 17], Tawḍīḥ [1: 476, 2: 370-371], Thiqāt [8: 135]
 9. サフル: Ansāb [3: 525], Jamhara [240], Jarḥ [4: 426], Lubāb [2: 235], Mashāhir [312], T. Di. [27: 131], T. Ka. [4: 312], Tah. K. [13: 122-123], Tah. T. [4: 412], Thiqāt [6: 473]
 10. ジャミール: T. Di. [27: 131]
 11. フサイブ: T. Di. [27: 131]
 12. ハーティム: T. Di. [27: 131]
 13. ナドル: T. Di. [27: 131]
 14. ハンマード: Ansāb [3: 468], T. Di. [27: 131]
 15. ビシュル: T. Di. [27: 131]
 16. アフマド: Jarḥ [2: 58], T. Is. [ḥ. 231-240: 48]
 17. ムハンマド: T. Di. [27: 131], Tawḍīḥ [1: 476, 2: 371]
 18. スハイル: T. Di. [27: 131]
 19. ムハンマド: T. Di. [27: 131]
 20. ムハンマド: Ansāb [2: 229], Ikmāl [3: 159], Mu'talif [2: 916], Tawḍīḥ [3: 431]
 21. ブライダ: Ikmāl [3: 159], Tawḍīḥ [3: 431]
 22. ブライダ: Ansāb [3: 361, 525], Lubāb [2: 167], T. Is. [ḥ. 491-500: 145]

※ 史料には, 系図上の人物以外にも, ブライダ家の一員と考えられる人物を見出すことができる。例えば Ansāb [1: 334], Ikmāl [1: 548] には, Abū Ṭāhir al-Buraydī という人物が挙げられている。史料記述によれば, 彼はブライダの子孫である。しかしナサブが不明なため, 彼を系図上に位置づけることは不可能である。

加していたという [T. Di. 27: 131]。このハンマードがいつ, いかなる形でこの運動に加わったのかは定かではない⁴⁶⁾。

革命運動の指導者アブー・ムスリム (Abū Muslim, 137/755年没。) が蜂起した頃 (ayyām khurūj-hi), アブド・アッラーフの子孫らにとってある重大な事件が発生した。

46) 革命史の基本史料である AD'A には, ハンマードの名を見出すことはできない。ただし同史料中のダーイー・リスト [AD'A: 221] には, Burayda b. Khuṣayb という名前が挙げられている。この名前は, フサイブの綴りの違い (ḥā' と khā') こそあれ, 明らかに教友ブライダを意識した名前であり, ブライダ家の革命運動参加を示す一根拠とみなしうる。

革命運動のナキーブ（「幹部」）であり、スライマーン・ブン・カスィール（Sulaymān b. Kathir, 132/750年没。）の義理の息子であったラーヒズ・ブン・クライズ（Lāhiz b. Qurayz al-Tamīmī, 130/747-8年没。）が、アブド・アッラーフの息子サフル（Sahl b. ‘Abd Allāh b. Burayda, 没年不詳。）の殺害をアブー・ムスリムに願い出たのである [T. Di. 27: 130]。理由は不明であり、アブー・ムスリムがこれを許したかどうかについても史料では触れられていない。しかし当のサフルは殺害を恐れ、アブー・ムスリムのもとから逃亡したという。

その後、勢力を拡大した革命軍はメルヴへの入城を果たす（130/747年）。その過程において上記ラーヒズは、政府軍の将ナスル・ブン・サイヤール（Naṣr b. Sayyār, 131/748年没。）のメルヴ脱出に手を貸した。後にこのことを知ったアブー・ムスリムはラーヒズの処刑を決定した [Sharon 1990: 157]。その時、処刑実行役を志願したのがアブド・アッラーフの孫ビシュル・ブン・サフル（Bishr b. Ṣakhr b. ‘Abd Allāh b. Burayda, 没年不詳。）であった [T. Di. 27: 131]。アブー・ムスリムもこれを許したという。その実行役はあるいはハンマード（前出。）であったとも言われるが [Ansāb 3: 468]、いずれにせよアブド・アッラーフの子孫がその処刑に関与した。逃亡したおじ、サフルの復讐を果たしたのである。

アッバース朝成立の後、子孫らの政治への関与は見られない。2/8-9世紀、メルヴのウラマーの間にマウラー出身者が目立つようになると⁴⁷⁾、それと並行するように、彼らは名声から遠ざかっていった⁴⁸⁾。イブン・ハズム（Ibn Ḥazm, 456/1064年没。）の証言によれば、メルヴにおいてアブド・アッラーフとスライマーンの子孫の数は多かった [Jamhara: 240]。しかし5/11世紀のブライダ・ブン・ムハンマド（Burayda b. Muḥammad, 493/1100年没。）⁴⁹⁾を最後に、彼らの名が再び史料に登場することは無かった。

47) マウラー出身の代表的アーリムはアブド・アッラーフ・ブン・アルムバーラク（‘Abd Allāh b. al-Mubārak, 181/797年没。）である。彼については *EP*²: “IBN AL-MUBĀRAK” を参照。

この時期のメルヴのウラマーを評した記述として、次のようなものがある [Ansāb 3: 515]。

アッバース・ブン・ムスアブ（al-‘Abbās b. Mus‘ab）は言った。「メルヴからは奴隸（pl. ‘abid）の子どもに属する4人が現れた。彼ら4人はまさしく当代のイマームであった。すなわち [その一人は] アブド・アッラーフ・ブン・アルムバーラク（‘Abd Allāh b. al-Mubārak）であり、ムバーラクは奴隸（‘abd）であった。[一人は] イブラーヒーム・ブン・マイムーン・アッサーイグ（Ibrāhīm b. Maymūn al-Ṣāygh）であり、マイムーンは奴隸であった。また [一人は] ハサン・ブン・ワーキド（al-Ḥasan b. Wāqid）であり、ワーキドは奴隸であった。そして [もう一人は] アブー・ハムザ・ムハンマド・ブン・マイムーン・アッスッカリー（Abū Ḥamza Muḥammad b. Maymūn al-Sukkārī）であり、マイムーンは奴隸であった。」

48) Ṭa. Ku. [4: 242, 7: 8, 365] によれば、3/9世紀以前のある時期に、ブライダ家の一部の者はメルヴからバグダードに移り住んだ。

49) 彼は晩年失明したが、77歳まで生きた。サムアーニーの叔父アブー・ムハンマドは、彼からハディースを伝え聞いたという [Ansāb 3: 361]。

おわりに

本稿では、ウマイヤ朝期のメルヴに生きたタービウ、アブド・アッラーフ・ブン・ブライダの人物像を主に人名録史料から再構成し、以下のような事実を明らかにした。

- ① バラズリーの記述からわかるように、彼の父はウマイヤ朝初期にメルヴへ移住したアラブの代表的存在であり、彼自身もまたメルヴ・アラブ社会で重要な立場にあった。
 - a) 征服後間もないホラーサーン地方へ「預言者の言行」を伝えることにより、彼はラーウィーとしての役割を果たした。彼からハディースを伝承した人々の中には、「アブド・アッラーフの徒」として知られる者もいる。
 - b) メルヴ「初代」カーディーとして、彼は当地におけるイスラームの安定化に寄与した。彼のカーディー任期はヒジュラ暦 82～109 年（西暦 702～727-8 年）中のある時期と推定される。彼の実際の働きぶりについてはほとんどわからないが、彼が伝えたとされる「3種の裁き手」ハディースやハディース伝承の系譜などから考えて、他のメルヴのカーディーらに少なからず影響を与えたと考えられる。
- ② アブド・アッラーフの重要性は、彼自身の事跡のみにとどまらず、ブライダ家の発展に寄与したという点にも見出すことができる。

彼は兄弟スライマーンより多い 4 人の息子をもうけた。彼の死後は、その息子たちや孫たちがメルヴ社会で活躍した。彼らの一部は「アッバース家運動」にも参加し、ナキーブ、ラーヒズの処刑に関わるなど、重要な役割を果たしたことが史料記述から窺える。
- ③ なおアブド・アッラーフの死後、彼の墓は参詣の対象となった。12 世紀には、それはメルヴ地域の人々による大規模かつ定期的な参詣を受けるに至った。

これらアブド・アッラーフを巡る事象は、単なるタービウのライフヒストリー研究という枠を超え、前近代イスラーム史上の重要な研究トピック——「大征服期のアラブについて」「ハディースについて」「ウラマーについて」「カーディーについて」「都市の名家について」「アッバース朝革命について」「墓参詣について」等——に結びついていることがわかる。言い換えれば、イスラーム史上の諸問題が彼および彼の一族の歴史に集約されているのであり、まさに彼を通して、メルヴにおけるそれらの実情を垣間見ることができるのである。その意味において、彼はメルヴ史を象徴する人物であった。

なお本稿では、下記のような点が課題として残された。

- ウマイヤ朝期からセルジューク朝期におけるメルヴのウラマー全体を調査し、アーラムとしてのアブド・アッラーフの位置づけを相対的に論じること。

○ 史料中に見うけられる彼に関する記述のうち現時点では解釈困難なもの⁵⁰⁾を検討すること。

○ 「メルヴの人々がなぜ彼の墓を参詣したのか」あるいは「人々が彼の墓への参詣に何を求めたのか」といった参詣に関する諸問題を解明すること。

今後も、さまざまな史料からできる限り情報を収集することにより、これらの課題に取り組んでいく予定である。

[追記] 本稿は、平成10～12年度の文部省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部に、その後新たに得られた研究成果を加えたものである。

参考文献

- AD'A: anon. *Akhbār al-Dawla al-'Abbāsiya*. (ed) 'Abd al-'Azīz al-Dūrī & 'Abd al-Jabbār al-Muṭṭalibī, Bayrūt, 1971 (3rd ed, 1997).
- Adab: al-Khaṣṣāf. *Adab al-Qāḍī*. (ed) Farḥāt Ziyāda, al-Qāhira, 1978.
- Ansāb: al-Sam'ānī. *al-Ansāb*. (ed) 'Abd Allāh 'Umar al-Bārūdī, 5 vols., Bayrūt, 1988.
- AQ: Waki'. *Akhbār al-Quḍā*. 3 vols., Bayrūt, n.d.
- Awsaṭ: al-Ṭabarānī, *al-Mu'jam al-Awsaṭ*. (ed) Maḥmūd al-Ṭaḥḥān, 11 vols., al-Riyāḍ, 1985 - 95.
- Ḍu'afā': al-Dāraquṭnī. *Kitāb al-Ḍu'afā' wa al-Matrūkin*. (ed) Ṣubḥī al-Badri al-Sāmarrā'i, Bayrūt, 1986.
- Futūḥ: al-Balādhurī. *Futūḥ al-Buldān*. (ed) 'Abd Allāh Anis al-Ṭabbā' & 'Umar Anis al-Ṭabbā', Bayrūt, 1987.
- Ikmāl: Ibn Mākūlā. *al-Ikmāl fī Raf' al-Irtiyāb*. (ed) 'Abd al-Raḥmān b. Yaḥyā al-Mu'allimī al-Yamānī, 7 vols., Bayrūt, 1990.
- 'Ilal: Ibn Ḥanbal. *Kitāb al-'Ilal wa Ma'rifa al-Rijāl*. (ed) Waṣīy Allāh 'Abbās, 4 vols., Bayrūt & al-Riyāḍ, 1988.
- Iṣāba: Ibn Ḥajar al-'Asqalānī. *al-Iṣāba fī Tamyīz al-Ṣaḥāba*. 4 vols., n.p.: Dār al-Fikr al-'Arabī, n.d.

50) Ansāb [4 : 135] に以下の逸話が残されている。

彼（ハサン・ブン・シャキーク・アルアブディー）は言った。「私はアブド・アッラーフ・ブン・ブライダが流水の中に小便する（yabūlu fī al-mā' al-jāri）のを見た。」

この逸話の真意はいったいどこにあるのだろうか。この逸話を伝えているハサン（al-Ḥasan b. Shaḥīq al-'Abdī）はメルヴの人間であり、この逸話を自らの著書に引用したサムアニー自身もメルヴ出身者である。メルヴにおいて崇敬の念を集めたアブド・アッラーフに関し、なぜこの異色な逸話が残されなければならなかったのか、現時点では不明である。

- Istiy'āb: Ibn 'Abd al-Barr. *al-Istiy'āb fi Ma'rifa al-Aṣḥāb*. (ed) 'Ali Muḥammad al-Bajāwī, 4 vols., al-Qāhira, n.d.
- Jam': Ibn al-Qaysarānī. *al-Jam' bayna Rijāl al-Ṣaḥīḥayn Bukhārī wa Muslim*. 2 vols., Bayrūt, 1984.
- Jamhara: Ibn Ḥazm. *Jamhara Ansāb al-'Arab*. Bayrūt, 1983.
- Jarḥ: Ibn Abi Ḥātim al-Rāzī. *al-Jarḥ wa al-Ta'dīl* (includes *Taqdima al-Ma'rifa li-Kitāb al-Jarḥ wa al-Ta'dīl* in vol. 1). (ed) 'Abd al-Raḥmān b. Yaḥyā al-Mu'allimī al-Yamānī, 9 vols., Bayrūt, n.d.
- Kāmil: Ibn al-Athīr. *al-Kāmil fi al-Ta'rikh*. (ed) C. J. Tornberg, 13 vols., Bayrūt, 1979 - 82.
- Lubāb: Ibn al-Athīr. *al-Lubāb fi Tahdhīb al-Ansāb*. 3 vols., Bayrūt, 1980.
- Ma'ārif: Ibn Qutayba. *al-Ma'ārif*. Miṣr: Hay'a al-Miṣriya al-Āmma li-al-Kitāb, 1992.
- Ma'rifa 'U.: al-Ḥākīm al-Naysābūrī, *Kitāb Ma'rifa 'Ulūm al-Ḥadīth*. (ed) Mu'zam Ḥusayn, al-Qāhira, n.d.
- Mashāhīr: Ibn Ḥibbān al-Bustī. *Mashāhīr 'Ulamā' al-Amṣār*. (ed) Marzūq 'Ali Ibrāhīm, al-Manṣūra, 1991.
- MB: Yāqūt al-Rūmī. *Mu'jam al-Buldān*. (ed) Farīd 'Abd al-'Azīz al-Jundī, 7 vols., Bayrūt, 1990.
- MmI: al-Bakrī. *Mu'jam mā Ista'jam*. (ed) Muṣṭafā al-Saqqā, 4 vols. in 2, Bayrūt, 1983.
- Mukhtaṣar: Ibn al-Faqīh. *Mukhtaṣar Kitāb al-Buldān*. (ed) M. J. De Goeje, Bibliotheca Geographorum Arabicorum V, Leiden, 1967.
- Musnad: Ibn Ḥanbal. *al-Musnad*. 9 vols., Bayrūt, 1993.
- Mu'talif: al-Dāraquṭnī. *al-Mu'talif wa al-Mukhtalif*. (ed) Muwaffaq b. 'Abd Allāh b. 'Abd al-Qādir, 5 vols., Bayrūt, 1986.
- Nasab: Ibn al-Kalbī. *Nasab Ma'add wa al-Yaman al-Kabīr*. (ed) Maḥmūd Firdūs al-'Azm, 3 vols., Dimashq, 1988.
- Qand: al-Nasafī. *al-Qand fi Dhikr 'Ulamā' Samarqand*. (ed) Yūsuf al-Hādī, Tehrān, 1999.
- Siyar: al-Dhahabī. *Siyar A'lām al-Nubalā'*. 25 vols., Bayrūt, 1994.
- Sunan A.: Abū Dā'ūd. *Sunan Abī Dā'ūd*. 4 vols., Bayrūt, 1994.
- Sunan M.: Ibn Māja. *Sunan Ibn Māja*. (ed) Muḥammad Fu'ād 'Abd al-Bāqī, 2 vols., al-Qāhira, n. d.
- Sunan T.: al-Tirmidhī. *Ṣaḥīḥ Sunan al-Tirmidhī*. 4 vols., al-Riyāḍ, 2000.
- T. Di.: Ibn 'Asākir. *Ta'rikh Madīna Dimashq*. (ed) 'Umar b. Gharāma al-'Amrawī, 70 vols. to date, Bayrūt, 1995 -.
- T. Is.: al-Dhahabī. *Ta'rikh al-Islām wa Wafayāt al-Mashāhīr wa al-A'lām*. (ed) 'Umar 'Abd al-Salām Tadmurī, 49 vols. to date, Bayrūt, 1987 -.
- T. Ka.: al-Bukhārī. *al-Ta'rikh al-Kabīr*. 9 vols., Ḥaydarābād, 1958 - 64
- T. Kha.: Khalīfa b. Khayyāṭ. *Ta'rikh*. (ed) Muṣṭafā Najīb Fawwāz & Ḥukmat Kashlī

- Fawwāz, Bayrūt, 1995.
- T. Nī.: Ḥākīm Nishābūrī. *Ta'rikh-i Nishābūr*. (ed) M.R. Shafī'ī Kadkanī, Ṭehrān, 1996.
- T. Ya.: Yaḥyā b. Ma'īn. *Ta'rikh Yaḥyā b. Ma'īn*. (ed) 'Abd Allāh Aḥmad Ḥasan, 2 vols., Bayrūt, n. d.
- Ṭa. Kha.: Khalīfa b. Khayyāṭ. *al-Ṭabaqāt*. (ed) Suhayl Zakkār, 2 vols., Dimashq, 1966.
- Ṭa. Ku.: Ibn Sa'd. *al-Ṭabaqāt al-Kubrā*. (ed) Iḥsān 'Abbās, 9 vols., Bayrūt, 1985.
- Tah. K.: al-Mizzī. *Tahdhīb al-Kamāl fī Asmā' al-Rijāl*. (ed) Bashār 'Awwādh Ma'rūf, 35 vols., Bayrūt, 1992 – 94.
- Tah. T.: Ibn Ḥajar al-'Asqalānī. *Tahdhīb al-Tahdhīb*. 12 vols. in 6, al-Qāhira, 1993.
- Tawḍīḥ: Ibn Nāṣir al-Dīn al-Dimashqī. *Tawḍīḥ al-Mushtabih*. (ed) Muḥammad Na'im al-'Irq-sūsī, 10 vols., Bayrūt, 1993.
- Thiqāt: Ibn Ḥibbān al-Bustī. *al-Thiqāt*. (ed) Muḥammad 'Abd al-Mu'īd Khān, 9 vols., Ḥaydar-ābād, 1973 – 83.
- Tr. Wa.: Ibn Khallikān (tr. by M. G. De Slane). *Ibn Khallikan's Biographical Dictionary*. 4 vols., Paris & London, 1843 – 71.
- TRM: al-Ṭabarī. *Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk*. (ed) Muḥammad Abū al-Faḍl Ibrāhīm, 11 vols., al-Qāhira, 1979 – 93.
- Uṣd: Ibn al-Athīr. *Uṣd al-Ghāba fī Ma'rifa al-Ṣaḥāba*. (ed) Khalīl Ma'mūn Shīḥā, 5 vols., Bayrūt, 1997.
- 'Uyūn: Ibn Qutayba. *'Uyūn al-Akḥbār*. 4 vols. in 2, Bayrūt, n. d.
- 余部福三 (1983) アッバース朝革命とホラーサーン『オリエント』26 (1), 69 – 84.
- Coulson, N. J. (1956) Doctrine and Practice in Islamic Law: One Aspect of the Problem. *BSOAS* 18, 211 – 226.
- Daniel, E. L. (1979) *The Political and Social History of Khurasan under Abbasid Rule 747–820*. Minneapolis & Chicago.
- Daniel, E. L. (1996) The 'Ahl al-Taḡādum' and the Problem of the Constituency of the Abbasid Revolution in the Merv Oasis. *Journal of Islamic Studies* 7 (2), 150 – 179.
- Жуковский, В. А. (1894) *Развалины Старого Мерва*. СПб.
- 花田宇秋訳 (1998) バラズリー著 諸国征服史 20『明治学院論叢総合科学研究』58, 31 – 110.
- Herrmann, G. (1999) *Monuments of Merv: Traditional Buildings of the Karakum*. London.
- Humphreys, R. S. (1991) *Islamic History: A Framework for Inquiry* (rev. ed). Princeton.
- Juynboll, G. H. A. (1983) *Muslim tradition*. Cambridge.
- Juynboll, G. H. A. (1986) Dyeing the hair and beard in early Islam A ḥadīth-analytical study. *Arabica* 33, 49 – 75. (being included in *Studies on the Origins and Uses of Islamic Ḥadīth*. Aldershot (VARIORUM), 1996.)
- Камалиддинов, Ш. С. (1993) "КИТАБ АЛ-АНСАБ" Абу Са'да Абдалкарима ибн Мухаммада

ac-Sam'ani как источник по истории культуры Средней Азии. Ташкент.

三浦 徹 (1995) ウラマー『講座イスラーム世界別巻 イスラーム研究ハンドブック』栄光教育文化研究所, 249-255.

佐藤明美 (1994) 初期イスラーム時代のメルヴ『イスラーム世界』43, 27-53.

Schachat, J. (1964) *An Introduction to Islamic Law*. Oxford.

Sezgin, F. (1967-84) *Geschichte des Arabischen Schrifttums*, 9 vols., Leiden.

Shaban, M. A. (1970) *The 'Abbāsid Revolution*. Cambridge.

Sharon, M. (1983) *Black Banners from the East*. Jerusalem & Leiden.

Sharon, M. (1990) *Revolt: The Social and Military Aspects of the 'Abbāsid Revolution*. Jerusalem.

嶋田襄平 (1977) 『イスラームの国家と社会』岩波書店.

al-Zirikli, Khayr al-Dīn (1996) *al-A'lam: Qāmūs Tarājīm* (the 10th ed). 8 vols. Bayrūt.

(九州大学大学院文学研究科)